# よくあるらきすた小説

三宝絵詞

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この小説は、よくいる男子高生と女子高生の、よくある学園生活。よくある青春とよくあるハーレム。特に秀でた物がないよくいる執筆者でお送りします。

# 目次

のめりこむ男 ―― 1
ずっこける女 ―― 13
チョココロネ女 ―― 29
喪女／平均になる男 ―― 40
病の女 ―― 53

# のめりこむ男

諸君らの趣味はなんだろうか。スポーツ？　読書？　それともネットサーフィン？　もしかすると老人ホームに遊びに言っては可愛がってもらったり、くっそきたない動画を見て脱糞する兄らもいるだろう。なるほど、どれもいいだろう。脱糞はちゃんとした場所でしてもらわなければ困るがまぁいいだろう。

ドイツやアメリカと違ってここは日本なのだ、そこまで行きすぎなければ厳しい刑罰もないしどれを趣味としていても受け入れてくれる人が五万といる。非常に寛容な国とも言える日本なのだ、間違っている趣味など人道を外れているような物しかないだろう。

斯く言う俺にも趣味がある。どこにでもよくあって面白味がないことだが、二次小説を読み込むことが趣味だ。一種のネットサーフィンと言ってもいい、携帯をポチポチと、もしくはパソコンをカチカチと押してはモニターに移る字を目で追いかける。

今年のアニメ、ゲームは豊作らしく二次小説（又は夢小説）はうなぎ上りでその人口を増やしている。チラッと小説検索サイト等に入って見ると、先月始まったばかりだと言うのにも関わらず執筆されている作品もちらほら見かける。

『マクロスＦ』はその代名詞だろうか。あのマクロス作品の新作ということで、期待値はかなり高いようだ。というかまだヒロインの全てが見えていないのに夢主を作ってイチャコラさせるのは大丈夫なのだろうか、いやまぁ確実に更新停止から拍手連打が来るだろうが迸るパトスを止めることが出来なかったのだろう。その気持ちは何となく分かる気がする。

『Ｔｏｌｏｖｅる』の作品も中々上がっているようだ。あれは漫画が元で何よりも週刊誌である『ジャンプ』出身だ、原作自体の更新速度の高さも相まって割とサクサクとかける人が多いようだ。しかしどの夢主も何故デビルーク王に好かれるのか……その方が展開的に楽なんだろうが、夢主の交遊関係から考えて宇宙が狭すぎるような気がしないでもない。

『ソウルイーター』という作品も目に入る。『ガンガン』の所で連載している漫画だったか、『ガンガン』はいつも『鋼の錬金術師』と『藍蘭島』と『キングダムハーツ』しか読んでいない、というかそれら以外はまるで興味が無いから『ソウルイーター』は１ページも読んでいない気がする。どうもあの『女王騎士物語』と一緒でまるでといっていいほど興味が湧かない……いや、アニメ化もしたんだ、今度は無視しないでちゃんと読んでおこうか。

ふとベッドとは逆方向に立て掛けられているデジタル時計に目をやる。《２００８

５／６　火　１：３５》と表示されているのを見て額に手をやった。

「……今日は学校じゃないか」

ＧＷが土日と被り、生憎の三連休となってしまったのを三日前に感じて国に直訴したいとか友人たちと騒いでいたのを鮮明に思い出した。過ぎてしまえば呆気ないＧＷだった。いや、恋人がいない男子のＧＷなんてこんなものなのだろう。

「……あー、彼女ほしい」

中学から付き合っていた彼女も、去年のクリスマスでフラれてしまった。今年に入ってから女の影は増えたものの、どうも友達の領域から一歩踏み出すことが出来ない。というかゲーム仲間意識がどうも抜けなくて踏み出すことに戸惑いを覚える、というのが正解なのかもしれない。

しかしそんなことを考えていても時間は刻々と進んでいくもの、これ以上の夜更かしは控えないと本当に遅刻してしまうだろう。大阪弁が特徴の教師の一撃を思い出して体が震えだす。

「寝よう、うん、寝ようマジで」

机に置いてある携帯とＰＳＰ２０００に充電コードを差して、俺は布団を被った。思った以上に脳も限界だったらしく、程なくして眠気が意識を霞ませていく。

そこで、ふと思った。「宿題やったっけ」と。

◆◆◆

夜更かしはするものではない。ましてや趣味に没頭して時間を忘れるなどもっての他だと、今俺は思い知った。

突然だが我が高校、『陵桜学園高等学校』の話をさせてもらおう。陵桜学園高等学校は埼玉県粕日部市にある歴史ある学校だ、その生徒数は1学年１０クラスでは収まりきらぬ程つまり所謂マンモス校に分類される学校である。

当然歴史ある学校というのはあのヤンキーカッコイイ時代を生き抜いてきたため、校則というのが少々緩めになっている。髪色なんて触れていないし長さも自由、流石に時代が変わった影響もあり煙草や酒の持ち込みは禁止となっているが携帯やゲーム類等は見つからなければしてもいいという暗黙のルールが立っているほど。

もちろん抜き打ち持ち物点検なるものもあるが学生同士のネットワークを持っていればそんなのは十分回避出来る事、皆でばれる前に自分の下駄箱やロッカーに隠しに行くのだ。この隠すために動く間に漂う独特のハラハラ感は癖になるくらいには面白い。

だが半面、厳しいところがあるのも事実だ。一つは成績、つまり授業態度やテストの点数だ。寝ていれば殴って起こされるなど当たり前、一度期末テストで悪い点数を取ればどれだけ悔やんでももう遅い、長期休暇を潰され毎日補習へと無惨な変化を遂げる。何が悲しくて皆が遊んでいる中、学校へ行かなくてはならないのか。友達が増えること

もあるが嬉しい誤算程度だ、何故かと聞かれればソイツもアホだからだ。

そしてもう一つ厳しくしている所がある、それは今俺が経験しそうになっている誰もが一度は経験する過ち。学校までの道のりを全力疾走しなければならない程のプレッシャーを与えてくるそれ。それが――

「遅刻だぁぁぁーーーーー!!」

叫ばなければやってられなかった。というか叫ばないと力が限界まで出ない気がした。全力を出したいときは叫ぶ、創作の基本である。だからと言って現状を変えることが出来るわけではないが。

――どうして今日に限って俺は寝坊するのか。

もう起こってしまった事実に、どうしようもなく後悔が沸き上がる。

今日はＧＷ明けとなる日だ。ＧＷが明ければ何が待っているか、これだけでもうお察しの諸君もいるだろうが敢えて言わせてもらおう。

小テストだ。それも結構な確率で１限目からであることが多い。現実、１限目の授業は小テストがある。さらに運が悪いことに、その先生は補習をわくわくしながら始める悪魔だ。勉強してこないお前らが悪いのだと言って嬉々として１５ページ以上の課題を出してくる鬼教師。折角のＧＷ明け、友人とも三日ぶりに会えるある意味わくわくできるその日に地獄を味会わなければならないなんて、そんなの許容できるわけがない。

「はぁ、ひぃ」

情けない声で息を切らしながらも走りを止めはしない。もう足はフラフラだし太ももには乳酸がたまりきっていてパンパン、汗はだらだらだしどうしてか全身が痒い。それでも止めてはいけないのだ、あのくそみたいな教師から笑顔を奪うために。このストレートを越え次の角を曲がれば門はもう目の前だ、諦めんなよネバーギブアップッ！と妖精の応援を受けながら、フラフラの足取りで進む。

そういえばついた後のことを考えていなかった。そもそも勉強する時間のことを計算に入れてなかった。いっそ走りながら勉強でもしようかと酸欠の頭で考え始めた時に、後ろから軽快な足音が聞こえてくる。

一秒程で数メートルは縮めてくるその足音に俺は戦慄をする。自分はこんなにもひぃひぃ言いながら数メートルを縮めているのに、後ろの奴はすいすいと走破しているのだ。よほどの運動部以外にこんなことはありえない。そこで俺は三つの心当たりを思い浮かべる。

一人は男友達である”片岡”だ、運動部の中でも走りに全てをかけている陸上部に在籍している若きエース。アイツなら納得の速さだ、十分ありえる。

いやだが待てよ、アイツは真面目気質だ。あの真面目野郎が俺と同じような遅刻と言う失態をするだろうか。というか、そもそもアイツには朝練があるじゃないか。

次に思うつくのは焼けた小麦色の肌が様になっている八重歯の少女。アイツも相当早かったはずだ、片岡と同じく女子陸上部の一年のエースとしてそこそこ有名だし、人気もある。だがアイツも陸上部だし、もちろん朝練があるだろう。中々に呆けている奴だが練習をサボるような奴ではないことは少ししか関わっていない俺でも分かる。

残る心当たりは一つだけ。纏めれば陸上部並みに速く、かつ陸上部には所属しておらず、さらに俺と同じで遅刻しそうになるほどの時間まで寝ている度胸のある奴。

そんなの、もう一人しかいないじゃないか。

「――――」

フラフラした俺の目の端に、猛然としたスピードで抜き去っていく〝青〟が移る。それが前に出たことですれ違った時には分からなかった情報がさらに加速する。

身長は小学生と言われてもおかしくないほどのもの、右手には我が高校の鞄を持ち、衣服として纏うは我が高校の制服。

スカートから覗く脚は太すぎず細すぎず、メリハリがきいている訳ではないがどこか色っぽさのようなものを醸し出している。

靴下はくるぶしより少し上で両足とも揃えられ、靴は俺と同じく走りにくい革靴。

全体的な白とピンクのコントラストに、髪色である青がよくはえる。

こちらの視線に気づいたのかどうかは分からないが、彼女はまるで勘づいたかのよう

にこちらを振り向き、にんまりと笑った。見ているだけでイラっと来るようなドヤ成分が含まれた笑み、そして口を開いてこう言う。

「負けた方がチョココロネ一個ね」

「……はぁ？」

彼女はもう用はないとばかりにまた一段ギアを上げて走り去っていく。俺はそれを呆然と見つめて、言われたことに対して思考を巡らせていた。

この競争に負ければ、俺が、アイツに、チョココロネを奢るだと。

ふと、財布の中身を思い出す。野口も樋口も、ましてや諭吉もない。小銭は平等院鳳凰堂が三枚だけ。そんな状態で奢らされるとすれば、俺は”あれ”を使わざるおえない。

敗けの結果は1メートル離されていくごとに濃厚となっていく。というか、まず勝てる可能性が皆無に等しい。だが、それでも今ここで敗けるわけにはいかない。”あれ”だけは俺が使うのだ、あんなチビに使ってやる義理などない――！

「ま、待ちやがれぇ～～…！」

それでも出る力など情けないほどに微量な物だ。

◆◆◆

朝礼が始まる五分前を指す時計を、俺は地面に転がりながら見つめ、安堵する。どう

やら遅刻は阻止できたらしい。とめどなく流れる汗とベタつくシャツ、身体中を蝕む怠惰がどうにも気持ち悪く立ち上がる気力を確実に奪っていた。今すぐにでも教室に駆け込まないと遅刻する訳だが。

「あ〟〜〜〜……もう無理……動きたくねぇ……」

「そんなこと言ってたら遅刻するよ？」

ほら、と言って手を差し出してくれる青髪の彼女。俺よりも速度は出ていたのにも関わらず俺と違って汗は微量だし息は乱れていない。お前の強さに俺が泣いた。涙はそのスカートで拭かせてくれ。

生返事をしながら改めて彼女を下から眺める。スカートの短さに比例せず、その制服の袖の長さは手首を覆うほど。彼女は場合は若干手首で折り畳んであるのがなんとも哀愁を漂わせている。

しかし身長はあれだが、本当にいい足をしている。ちゃんと毛も処理できているし怪我をしたような跡も見当たらないためますます綺麗に見えた。

「……ちょっと、いつまで足見てんの」

「へ？　あ、あぁ……悪い」

彼女の手を握ると、ぐっと引っ張ってくれるのを感じる。なんというか、見た目と内にある力の量が比例していないぐらいの力強さで引っ張られる。こっちとしては楽で

いいが、本当にどこで鍛えてるんだろうか。
「ほんとにやめなよ、その舐めるように見るの。そろそろ通報されそうだし」
「やかましいわっ」
しかし本当に舐めてはいないがいかがわしい視線を向けていたのは事実なので強く言えないのが悔しいところ。いっそことGSの元で働けばこのスケベェ♂な心も許されるかもしれない。あ、ダメだ百倍の暴力になって帰ってくるわ。栄光の手欲しいけど欲しくなくなったわ。
「じゃ、よろしくネ」
「はぁ?」
すっとんきょうな声をあげれば彼女はニヤリと笑う。そうして「チョココロネ」と一言告げてくる。
あぁ……忘れていた。そういえばそんな約束もしていた。いや約束というより強引に押しつけてきた脅しのような物に近かったが。
「あと乙女の足と手を堪能したからプラス二個」
ムフッと笑う彼女を尻目に、俺は手で顔を覆った。襲うのは果てしない後悔と、大事な物を失った喪失感。さらば購買無料券……っ。
財布から渋々取りだしそれを手渡すと、彼女は興味を無くしたと言わんばかりにご機

嫌なステップで校舎へと歩みを進める。
校舎に取り付けられた時計を見れば朝礼三分前であることに気づいて、急いで彼女を追いかける。
「で、なんでこんな時間になったんだ？」
「いやぁ……激運が続くとどこまで続くかとか、もっといいのが出る可能性が微レ存とか思ったりしない？」
「あー、分からないでもない。で、何が出たの？」
「ふっふっふっー、世界樹の晶剣。☆１１」
「うげっ、またでかいの出しやがって……」
「実はユグドラシルの攻略法が見つかってねー」
「言い値で買おう」
「文無しになった奴は、入れてくんないぜ？」
「入れてくれなくったって入る。効率を取り戻すんだ」
「と、まぁ冗談は置いといて。今夜３４部屋においでよ、メンバーと一緒に教えてあげるから」
「よしきた、絶対行く」
「待ってるよー」

そういって彼女はいつも通り嫌らしく笑った。

”泉　こなた”。俺と同じ高校二年生、クラスメイトの一人。生粋のオタク、俺のゲーム仲間の一人で、友人の一人だ。

# ずっこける女

体育の授業というのは退屈な物だ。出来る奴からすれば学校で唯一はしゃげる時間であり、なにより女子に自分をアピールできる時間でもある。だが俺のような出来ない奴らからすればそんな奴等に混じって授業を受けなければならないというのは苦痛でしかない。

はしゃぐというのは、本音が漏れると言うことだ。狭い教室に座って受ける授業よりも外であるというのはとても開放感に満ち溢れているものだから、出来る奴らのタガがよく外れる。つまり出来る奴が出来ない奴に絡んでくるのだ、こいつならしてもいいとかこいつを笑い者にしてやろうとか思ってニタニタと笑って近づいてくる。木を隠すなら森の中と言うが、そもそも種類が違う気は森に隠れようと目立つのが更に目立ってしまう。つまり、本当に出来ない奴は平均よりも出来ないから人の中に紛れようとどうしても目立ってしまうと言いたいのだ。そのせいで余計絡まれやすくなって非常に面倒くさい。

もう分かっているだろうが、俺も運動が出来ない奴らの一人だ。中学の頃はよくいる

『キャプテン翼』の愛読者であったから、サッカー部に入って活動していたのだが色々あって一年でやめ、二年からは漫研部としてオタクライフを満喫していた。この経歴から分かるように元運動が出来る奴だったのだが、もうスポーツを本気で止めてから４年になる。体力やら足の速さは当時の半分以下にまで衰えてしまった、デブよりは速いが平均より遅い。その程度の運動神経であるというのは向こうからすればいいアピール利用対象になるらしく、よく勝負のような物を挑まれる。結果はもちろん全敗である。

閑話休題。

要するに俺は体育の授業というのものが学校にいる時間の中で最も苦痛な時間であると感じている、ということだ。

これがアニメやラノベであれば、俺は平均的な運動神経をしているか圧倒的な力を持っているがセーブしているか屋上でサボって強面優しいなんちゃってヤンキーだったのだろう。まぁお分かりの通り俺はそのどれでもないのだが。

一分一秒でも早く終わって、のんびりと教室で『†月夜の獣†』でもチェックしたいと考えている時、視界の端で男子顔負けの速度で駆け抜けるチビが映る。

それが泉　こなたであると気づくのに時間はかからなかった。一応男子と女子のトラックは分けられているが、出来る奴らの顔が中々に渋いところを見る限り泉の速さというのは相当な物のようだ。俺はまるで何もしていないし関係ないが、少々スッキリと

した。
「速いよなぁ、泉さん」
「片岡だって十分速いじゃん」
「そりゃ僕は努力をしてるから。でも、泉さんって走り込んでるとか見たことないし……持って生まれた物って奴なのかなぁ」
友人と語らう泉を眺める片岡を見つつ、俺は思考に浸っていた。
もって生まれた物、才能を言い換えた言葉。なるほど、泉が走りのためまともに努力をしているところなど俺も見たことがない。だからと行って段階も踏まずに速くなったと言えば、それはきっと違う。思うに、怪我の功名なのだろう。
今朝のように夜更かしの多い奴だ、きっと寝坊の常習犯なのだろう。だが一年の時は遅刻をするのは極稀だった。一年の頃は然程興味もなかったから、来たら居なかったのにホームルーム直前に見渡すといつの間にかいた程度の認識だった。多分、遅刻を回避したくて走ってたら速くなったんだろう。女子の中では右に出ることを許さないほどの運動神経を持っているかもしれない。片岡にはそれがとても羨ましく見えるのだろう。
「ま、所詮男女だ。気にすんなよ」
「ははは、分かっているさ」

甲高い笛の音が響く。見ればゴツい教師、俺らの体育の担当教師が全員集合の由を叫んでいた。そういえば今日はサッカーをするだかなんだか先週に言ってた気がする、まるで気が進まないが行かなければ怒られて連帯責任とかいってクラスメイトを巻き込んでいくだろう。そうなればただでさえ居心地が悪いのに更に悪くなる。

腹を括るかと腰を上げたところで、すぐ側に女子がコケて滑ってくる。

「うおっ」

なんだなんだと女子を見る。淡い紫に染まった髪に黄色いリボンがアクセント、いやアクセサリーとしてセットされていた。髪は短く切り揃えられていて、寝癖は見当たらない　。いつもどこかしら跳ねている泉とは大違いで、そこからは性格がざっくばらんである感じは見当られない。

そんな艶のある清潔さすら感じる女子は地面に顔をつけて呻き声を上げ震えていた。結構な勢いでコケたことが関係しているのだろう、端から見た俺からの感想は「痛そう」の一言に尽きるほどの見事な物だった。褒めるような物ではないことは分かっているのだが。

「痛いぃ…」

先程まで真っ白であった名前入りの体操服を土まみれにした格好で、女子はよろよろと体勢を整えていく。

まず顔が見える、垂れ下がった眉と涙で溜まった瞳からしてキツい人格で無いことが分かる。むしろ人畜無害に近いというか、おっとりしていそうな顔つきだ。運が良かったのか、顔から行ってなかったのか。その潤った餅のような肌には傷ひとつ付いてなかった。土まみれではあるが。

だがやはりと言うべきかひざには多量の土の下から赤の液体が滲み出していた。医学的に言うのなら軽い擦り傷という一言で済むが、経験者からすれば浅いという言葉が信じられないだろう。それほどの痛みがひざから嫌というほどに響いてくるのだから。

擦り傷は、ご丁寧に両足に負っていた。それと、片肘にも。学校生活の中では中々の重傷じゃないだろうか。

「えっと、大丈夫か？」

「と、とっても痛いよ……」

「あー、だろうな。片岡、朝倉さん呼んできて」

「なんで僕なのさ」

「だって彼女だろ」

「……瞳は休みだよ。風邪だって」

「げ、じゃあ残ってる保健委員って……」

「君だね」

認めたくなかった現実が重くのし掛かるのを感じて、手のひらで顔を覆う。いつも保健委員の仕事を押しつけてきたツケが、今日という日に回ってきたらしい。

そもそも俺は保健室というのがあまり好きではないのだ、今時ではありえないと思う人達もいるかもしれないが、うちの高校では保健室でサボるという不貞な輩がいるものだから時々絡まれることがある。聞きたくもない話を聞かされ話したくもない話をさせられる、友人であれば別だがこちらのリズムを乱してくる奴らが俺は大嫌いなのだから。

「え、えっと。大丈夫だよ？　ほら、こうやって、ひぅっ……た、立てるから……！」

「生まれたての小鹿のようにガックガクだね」

目に涙をため、土まみれ血だらけの脚を震わせながら立っているその姿に「見ていられない」という言葉が心情を埋める。同じような心境なのか、視界の隅っこの片岡はこちらを責めるように視線を向けてきた。

何をすべきか、俺だってわかっている。恥ずかしさもあるが誤魔化すために一つため息。

彼女の前にいき、背を向けてしゃがむ。

「……？」

「おんぶだって！　早くしろ！」

何してるのって目で見てくるなよ俺がおかしい奴みたいになるだろっていうか皆見てくるから恥ずかしいんだよ！　なんて気持ちを押し込んで簡潔に纏めて怒鳴る。彼女はびくりと驚きとっさに声を上げる、無駄にいい返事だった。答えたからにはもう逃げられないと思ったのかおっかなびっくりそろそろと背中に身を預けてくる。

……見た感じそうでもなかったのに、こう密着して初めて気づく。この子は、意外といい物を持っていた。ありがとうございます。

「よっと」

ぐっと力を入れて立ち上がる。

「んじゃ片岡、先生にヨロシク」

「そこは僕がするのかよ……わかった、両方に伝えておくよ」

片岡は持ち前の俊足であっという間に離れていった。アイツは泉を羨ましがってたいたけど、手放したこっちからすれば羨ましい限りだと思う。

背中の彼女がおろおろしているのを感じて、そっと周囲を見渡してみる。男子からは楽しむような視線と睨み付けるような視線が９：１、女子のワクワクしてる視線と冷たい視線が４：６。統計すれば、ここに居てはいけないという結果を導き出せる。

ため息と一緒に、洗い場への一歩を踏み出した。

◆◆◆

「ふ、古谷くん。そろそろ下ろしてくれれば嬉しいなって……」
「駄目だ」
「ほ、ほらっ。私って重いし、古谷くんもそんなに運動得意じゃないみたいだし辛いと思うし！」
「軽いからキツくない。まだ歩いて五分もたってないし余裕だ」
「わ、私が恥ずかしいよぉ……」
「俺だって恥ずかしいわ」
　それっきり彼女は黙ってしまった。確かに高校2年にもなって異性におぶってもらうというのは、女性からすれば想像以上に恥ずかしいことなのだろうと思う。実際、男である俺は異性を背中に背負うという行為の不可抗力として全体的に柔らか目な感触や女子特有の仄かな香りが俺の一部分を大きく刺激する。何がどうなっているのかとかの意識を向けてしまうため妄想も育むし彼女自体を意識してしまうことも辛い。
　具体的にはこんな子と付き合えないのが辛いのだ。
　というのも、俺が彼女を無理に下ろせない理由にも繋がってくる。
　角を曲がる際に、さっと通ってきた道を確認する。そこにあるのは授業中特有の静寂と、何かを怨むような黒いオーラと激しい歯軋りの音。
「ふ、震えてるけど、どうかしたの？　やっぱり重いんじゃ……」

「あぁいや、違う。そうじゃないんだ。なんでもない、大丈夫」

彼女、〝柊　つかさ〟はクラスでも有名な天然女子だ。

普段からポケポケしている彼女は授業を寝るのは当たり前、物を忘れるのは日常茶飯事、夏服へと変わった当日に冬服で登校してくることもあるほどにポケっとしている。

「犬も歩けば棒に当たる」というが、彼女の場合「柊　つかさは歩けばどこかにぶち当たる」と言った感じか。その彼女が持つ天然性の危なっかさが父性、母性本能をくすぐるのかクラスメイトの中でもそこそこ人気が高い。

そう、変なストーカーが付くくらいには。

「脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄
引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ
抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊
髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っ
こ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き
脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄
引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ
抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊髄引っこ抜き脊
髄引っこ抜き……――」

黒く淀んだ怨念の声が聞こえる。怨念以外に熱さえ籠っていない異様な無機質さに、ゾクリと背中を震わせる。

……いるっ！　さっきはあんなに離れた場所でオーラを出していただけなのに、今はこんなにも近くで呪詛を呟いている。一体何が彼女をここまでさせるのか、母性本能が暴走したとは言われているがそんな物だけでここまで人間を止めることができるのだろうか。もはや妖怪に近いレベルだ、助けて鬼の手。

「あっ、洗い場っ」

安堵した声が背から聞こえると同時に、ねっとりと付きまとう妖気（のように感じるもの）が消える。それを感じて、俺もほっと息を吐く。とは言えまだ視線は感じるから油断は一切できないのだけれど。

「下ろすぞ。自分で洗えるか？」

「さ、流石にそこまでしてもらうわけにはいかないから……」

そうか、と軽い返事と共にゆっくり下ろす。地に脚をつけた彼女はまだ少々痛むのか歩む度に小さな悲鳴を上げていた。

傷口に触れないように土と血をさっと洗い流す様を見ながら、俺はその脚に目を向けていた。

柊妹は泉と違って平均的な女子よりまだ小型程度の身長をしている、つもりは泉より

もはるかに高校生らしいということだ。泉の脚は俊足持ち特有の柔らか目、ふっくらとしてモチモチとしていそうに見えるがその実ちゃんとした筋肉の固さというものを内に持っている太ももだった。

だが柊妹は転けている所から察するに、そもそも運動というのがそんなに得意なのではないのだろう。太ももは弛んでいるしできる女の脚をしていない。しかしそれを上回るほどの美点、ムチムチ感がある。

よくまるまる太った魚を見ると美しいと感じることがある、それは大きさもそうだがそれ以上に全体的から生命力というのに満ち溢れているからだ。生命力というのは、色気にも繋がる。

ワガママスタイルという言い方がある、あれは血筋も関係するのだがそれ以上によく食べよく寝て健康的に生きているからだ。ストレスから無縁な生活を送る女性ほど胸は大きくなりやすい、そうして人生を謳歌する人間は生命力をみなぎらせている。

彼女の脚からは、その生命力をひしひしと感じる。弛んでいるのではなく豊満である、出来ないのではなくしなくても美しいのだ。理想な脚線美からは遠いかもしれないが、それはそれで味というものが――

「えっと、古谷くん？　ちょっと、恥ずかしいんだけど……」

「ん。あ、あぁ……悪い」

気づけば、柊妹は既に洗い終えていた。少々脚を見つめすぎたらしい、柊妹の頬はほんのりと血色がよく染まっていた。
「あの、その、古谷くんも男の子だから仕方ないかもしれないけど……あんまり、無断で見ちゃダメだよ？　女の子は、そういう視線も気にしてるんだから……めっ、だよ」
「（結婚しよ）」
◆◆◆
「すいませーん、怪我人なんすけどー」
張り上げた声は保健室に響き渡り、最後まで響き抜き、静寂が訪れる。どうやら、先生は席を外しているようだ。
「……あー、とりあえずベッドに座っといて。俺がやるから」
「えっ、古谷くんってそういうことできるの？」
「昔、怪我人を見ることが多くて。その影響。俺サッカーしてたから」
「あ、よくコケる人がいるんだね？」
「短パンだし、防ぎにくいからな。スライディングとかでとっさに膝からいくときもあるし」
「き、聞いてるだけで痛くなるよ……」
「そりゃ怪我人なんだから痛いだろ」

「あっ、そうだった。……えへへ」

照れ隠しで笑う様は、まさに天使の如く。告白願望を根性で押さえつけて、柊妹の所へ向かう。そうしてピンセットを手に取る。

「目を閉じた方がいいぞ」と一言告げて傷口に入り込んだ小石を丁寧に取っていく。麻酔のような何かのお陰で痛みはないだろうが、取られていく違和感を拭うことはできない。柊妹の表情もそれほど良いものではなかった。

数分かけて全ての傷から小石を取り終えたら、そのピンセットを置いて次のピンセットで綿を挟む。その後消毒薬を小皿にたらし、挟んだ綿を浸すと綿は色を赤黒く変えていった。

その様子をいつの間にか目を開けていた柊妹が見ると、途端に慌て出す。

「ま、待って待ってっ。まだ心の準備が……っ！」

「知るか。染みるぞ」

綿を傷口につけ、薬を塗り込むように擦る。

「～～～～～～ッ！」

声のない悲鳴が、やけに色っぽく感じた。

あ、やべ、勃った。

◆◆◆

「これで終わりっと」
　最後にガーゼを貼ってやると、柊妹は明らかに安心したかのようにほっと息をついた。そうしてそのままベッドへと身を投げ出す。そんなに嫌だったのだろうか。
「ね、眠たかったぁ」
「……なんというか、流石だな」
「あはは。ほら、春って暖かいから、つい」
「ま、確かにいい天気だよなぁ。そこに先生の呪文が組み合わされば眠たくもなるか」
「そうそう、それでつい眠っちゃったりとか……」
「それで先生に机蹴られて起こされるんだよな。何も蹴ることないだろ」
「そうだよねー。もうすごい怖いよねぇ」
「お前はチョップで済んでるじゃん。あの先生男女差別が激しいっていうか、女子高生に何か思ってるっていうか」
「あっ、やっぱりそうだよね？　時々見る目が怖くて……」
「先生だからって何してもいい訳じゃねぇっての」
「そうだよね！」
　そんな言葉に真面目な顔で大袈裟に頷く柊妹は、どこか可笑しくてつい笑ってしまう。柊妹は何故笑われたのか分からないようで少しムッとしているように見えた。

「悪い悪い、一々リアクションが大きいのが面白くてな」
「あっ。それ、お姉ちゃんにもよく言われちゃんだよね～。そんなに酷いかな？」
「酷くはないから直さなくていいと思うぞ。むしろ俺は改めていい奴だなって思えたしな」
　柊妹との付き合いは長いものではないが、友人関係だ。今までのを見ての通り普段は喋るだけだが、こんな風に手を貸したり貸されたりと全うな関係を送っている。俺の中では俺と付き合いのある女子の中で、一番恋人にしたいと思っている女子Ｎｏ．１の座を三ヶ月連続で不動の物とした天使なのだ。だがさっきいたクレイジーサイコレズや姉という圧力を前に、悔しいが手も足も出ず言葉通り泣く泣くアピールするのを断念している。
「ってやべ、そろそろ戻らないとゴリラがキレる。ここにいてていいぞ、先生からは俺が言っとくから」
「あっ、うん。わかった」
　ドタバタしながら出口へと向かう。本当に時間がない、あと一分でもサボってたら担当教師であるゴリラの雷が俺に降り落ちる。それだけは絶対に阻止しないとまずい、具体的には俺の脳天がまずい。
「あっ、待って！」

「なに!?」
「怪我、ありがとう」
そう言ってふんわりと微笑む柊妹、ほんと、なんでだろうな。なんでこんないい子と付き合えないのだろうか。正直打倒姉とクレイジーサイコレズを掲げてもいいぐらいに恋人にしたい。めちゃくちゃキスとかしたい。脚舐めたい。
それでもそれは許されない、クレイジーサイコレズなら、本気でナイフを学校に持ち込みかねないからだ。俺だって自分の命は惜しい。だから俺にキメた去り方は許されない。
「保険委員の仕事だったし、気にしないで。それと、今日はお湯に浸かるなよ」
それだけ伝えて、俺は保険室を出た。
無駄にいい陽射しを送ってくるおてんと様と、柊妹の笑顔を重ねながら。

# チョココロネ女

昼休みとはなんのためにあるか。正式に言うのならば食事休憩というものだが、その名の通りのために存在する。ただでさえ高校生は４時まで授業で拘束されるのだ、３０分から1時間程の休憩がなければやってられない。

その長い時間で何をするかは様々だ。校庭で遊んでくる奴らもいれば図書室に行き静かに読書を堪能する者、それとは真逆に友人たちと語る奴らまでいる。俺は友人と机をくっつけ飯を食いながら駄弁り、飯が終わっても駄弁って昼休みを終える。つまり後者に分類される時間の使い方をする。

とは言っても本日は生憎のぼっち飯の予定だ。

片岡という男子がいる、俺の友人の一人だ。だがこいつは特に仲のいい俺を含めて三人組の中でも彼女持ちという余った二人が持っていない、とんでもないアドバンテージを持っている。

本日は彼女である”朝倉　瞳”と共に屋上でラブラブ食事中だ。実に羨ましい。俺も早く彼女を持ちたい。

三人組の最後に一人、名前を”三宅　修二”。楽観主義、簡単に言えば今が楽しければそれでいいじゃん主義の持ち主で俺の友人の一人だ。勉強よりも娯楽、授業よりも惰眠、男友達との誘いより女友達との誘い。先のことを全く見通さずに行動をする素晴らしい脳をお持ちのこいつ。

当然授業についていけるわけもなく、現在お昼休みだと言うのに別室でたまりにたまった再テストを消化中である。纏めれば、ただの阿呆だ。

俺という人間はこの二人と共に三人組となって行動するというのを基本としている。別に他に友人がいないわけではないが、二人と一緒にいるのが一番気楽で楽しいのだ。他の友人は二人ほど深く知っているわけではないからどうも尻込みしてしまう、つまるところ俺には踏み込む勇気というのが圧倒的に足りていない。

いやだが少し考えてみる、別に踏み込めないからなんだと言うのだろうか。人には必ず触れてほしくないことや踏み込んで欲しくない問題というのを持っている。それにへらへらと近づいて触り回って怒られ、挙げ句の果てには友人が離れていくという最悪の状況になるよりは大分マシだ。

そうつまり踏み込めないことは悪ではない、むしろ他人を思いやる優しい気持ちを持っている最高の人間ということに……――

「ノックしてもしもぉ～～し」

「すまないが友人以外は帰ってくれないか！」
「やっぱりホモじゃないか（歓喜）」
「……なんだ泉、お前か」
　あはっと笑うそいつを視界に入れて静かに安堵の息を吐く。正直、さっきの返しを分からない奴に聞かれていたらクラスでもヤバイ奴扱いされていた。泉でよかったと思う反面、泉はまずいと思う自分もいる。大体こいつがこっちに来るときは何かを求めているからだ、チョココロネとか牛乳とかコンプエースとか。
「で、今日は俺から何を取っていくんだ？」
「んー、今日はいいカナ。むしろ今日の私は与える側なのだよ」
「はぁ？」
「古谷殿、今日一人っぽいし一緒にご飯でもどうでおじゃるか？」ホホホ
「ありがたき幸せッ！」
　女子との、昼飯タイム！　女子との、会話タイム！　女子との、甘い一時！　いーじゃんいーじゃんすげぇじゃん！　愉快に最高にキマっちまったぞォ！　この歓喜を持って、スペースザウルスに進化するドン！
　今の俺は底を尽きかけているコミュ力さえもソウルエナジーＭＡＸに出来るほどのｗｋｔｋパワーを持っている。つまるところ今の俺はオタクという枠を越えてＤＱＮ

と呼ばれる存在とも相対して話すことが五分もできる。

友人？　知らない子達ですね……。

当然この時の俺は舞い上がっていたから、うわぁ必死なんて思っている泉のことなど知る由もなかった。

◆◆◆

ハンカチを風呂敷のようにして包んだ弁当を持って移動した俺が泉に案内されたのは当然ながら泉の席だ。けれどそこは授業中のような状態ではなかった。

向かい合った二つの席、つまり昼飯時にのみ許される合体机の構えだ。机を突き合わせていると言えばわかりやすいだろうか、俺が友人二人と弁当にするときもこの状態を頻繁に使う。

へっ、俺の分を先に用意しているなんて可愛い所もあるじゃねぇか。なんてことを一瞬でも思った俺を殺したい。至極当たり前だった、泉が俺と二人きりで飯を食うはずなんてあり得るはずもないのだ、１％たりとも。

そう、突き合わせた机の片方にはもう一人の女子が座って弁当を開けるのをそわそわとして待っていたのだ。そういえば、こいつは常日頃泉と一緒にいたっけか。あまりに浮かれすぎて当たり前のことを忘れていたようだ。

「おまたーつかさ」

「あっ、こなちゃんお帰り。誰を……って古谷くん？」
「おっす柊」
　手を上げて軽く挨拶をすると、柊妹はそっちのけで鏡を取りだし髪を弄り始める。あの、流石に無視は寂しいんですけど。そうして数秒がたった頃に彼女は独りでに満足げに頷いて改めてこちらを向いた。
「こんにちは古谷君。ちょっと待ってね、こなちゃんと話があるから」
「お、おう」
　そう言って柊妹は泉の肩を持ってこちらに背を向けた。無視した挙げ句仲間外れっすか、これは最高に嫌な予感がする。具体的には「くさい」とか「きもい」とかの悪口だ、そんなにまずいだろうか俺は。これでも最低限に身嗜みには気を付けているつもりなんだけど。
　いや、男の俺の「つもり」なんて女性からすればまだまだ不潔に感じる物かもしれない。くそっ、もう少しアイツからそこら辺のことをよく聞いておくんだった。
「こなちゃんっ。――で古谷君――ちゃっ――!?」
「だってつかさ――――たら――――だもん。――する――――する
でガンガンいこうぜ――――ないと」
「そ、そう――――けど――――よ……っ！」

やっぱり俺のことで話しているようだ。聞き覚えのある単語だけは辛うじて拾えるが、実際に何を言っているか想定するのは難しい。

しかし悲しいことにガンガンいこうぜという単語だけはくっきりはっきり聞き取れてしまったのがオタクの悲しい性である。しかしやっぱりこう女性にボソボソと言われるのは精神的にキツいものがある、もう帰っていいかな。

「あ、あーっと……やっぱり俺一人で……」

「あっ違うの古谷君！　全然気にしなくていいから！　どうぞ座って！」

「いやちょっと待てだからって自分の席差し出さなくていいって」

丁度良いところにあったラクガキだらけの机を持ってきて泉たちの机に引っ付ける。

「それ三宅君の机だけど……」

「奴にはもういらん」

ガタリと音を鳴らして三人で席につく。

泉は鞄からチョココロネと牛乳を、俺は風呂敷の結び目をほどいて弁当に日の光を当てる。

「わっ、古谷君そんなに食べるんだ。やっぱり男の子だねー」

「まぁ後で適当なガムも食うからとりあえずだな、柊はちゃんと弁当だからいいとして……泉、お前そんなので足りるのか？」

「ん？　こっちの方が早く済むし安いでしょ。それにコンプエース代が浮く」
「まぁ、だろうなとは思った。後でガム恵んでやろうか？」
「ガムってカッコつけてるけど食べてるのはハイチュウじゃん」
「チューイングガムだからガムなんだよ」
「えっと、ハイチュウ美味しいよね！　私はイチゴ味が好きだなぁ」
「イチゴも旨いよな、一番人気かなんか知らないけどすぐ無くなるし」
　最寄りのコンビニとスーパーで悉く全滅しているのを見かけた時は泣きそうにあったぐらいだ。グレープだけ残ってるのがなんとも言えない哀愁を漂わせているのが気になるところだけど。
「あっ分かる。そうなんだよねー、コンビニによっては売ってないし」
「あれほんとなんなんだろうな、グレープとグリーンアップルは売ってるくせにな」
「そうそう。折角寄ったのにすごい悔しくなるよね～」
「……っていうかさ。それそもそもイチゴ味が売れてない可能性の方が高くない？」
「あぁ！」
　俺が見えざるカーバンクルを従えていたら貴様の牛乳を溢させていた所だ、全く命拾いしたな泉。
「……ねぇ、チョココロネってどっちから食べる？　細い方と太い方」

「え？　私は細い方かなぁ」
「へぇ私は太い方なんだよね」
「その会話意味あるのか？」
「あるよ、話も広げられるし。例えば……そうだ、チョココロネの頭ってどっち？」
「私はこっちの細い方だと思うよ」
「へー、私はてっきり太い方が頭かと思ってたよ。ところでなんで細い方？」
「だって貝殻みたいじゃない？」
　泉のチョココロネを注視しながら脳内で貝殻と重ねてみる。……うむ、なるほど。確かに見える。
　柊妹の考えはいつ聞いてもふわふわしているというかファンシーだなと思う。
「こなちゃんは？」
「だって芋虫みたいじゃん」
　あまりにも現実的というかグロテスクな発想に柊妹は可愛らしく悲鳴をあげた。というか、脳内で芋虫を思い描いてしまっただけかもしれない。
　こちとらちゃんとした飯を食っているのに、なんてことを言うんだこのオタクは。もう少し二次元よりの考えがあっただろう、マントを広げたときのゼロに見えるとかギガドリルブレイクとかさ。

「ふ、古谷君はどう思う？」
「んー……太い方だな」
「やっぱ芋虫？」
「違うって。あー……やっぱなし。なにも思わない」
「えー。そこまで言われると気になるよー」
「そうそう、早く言わないとご飯が牛乳漬けになっちゃうゾ」
「やめろ馬鹿ッ。わかったわかった、言うから！」
弁当に蓋をしてから軽く深呼吸、羞恥心を飲み込んでから言葉を出す。
「……――――――メ」
「なに？」
「だから、ジンベエザメに見えるって言ってるんだよ！」
そう言うと二人は「あぁ～……」という表情をして納得をする。
次いで泉がいつものニヤニヤを始める、録なことを考えていない時にする笑い方に心中で頭を抱える。だから言いたくなかったんだ、くそっ。
「なんていうか、可愛いね古谷君！」
「それ褒めてねぇ！」
「いやいや、とっても可愛らしい発想だと思うよほんと」

「そのニヨニヨやめろッ！」
「あっ、ジンベエザメって言われるとアンコウさんにも見えるね！」
「シャコとかにも見えなくもないねー」
「もうやめてくださいお願いします！」
今度からはジンベエザメを思い浮かべながら食べよう、と呟く泉に俺はさらに頭を抱えるのであった。
それから数分、何事もなく食事を進めていると視界の端に写る泉がどうにも気になるような行動を取っていた。
細い方から一口かじり、その圧力から太い方へと出てきたチョコをこぼれる前に急いで舐める。舐めおわれば満足したようにまた細い方を一口、圧力のせいか太い方からでてきたチョコをまた舐めて……。これの繰り返し。
それの後ろでは桃色の女子生徒が言うか言うまいかおろおろとしている。ここにいる三人の面子とは知り合いであり友達である、のにも関わらず本人は一言かけるのにすごく悩んでいるようだ。
ついに泉が面倒くさくなって無理矢理一口に押し込んだその時に、桃色の彼女が声をだす。
「あのっ。細い方をちぎって、太い方のチョコを付けて食べると言うやり方も……」

まさにその通り。今までの自分の馬鹿みたいな行為を見られていた羞恥からか、はたまた言われてから気づいたのか、彼女は口に物を含めながら唸った。

# 喪女／平均になる男

牛乳を一口、口内に残るチョコの味も流すようにぐいぐいっと飲み干していく。うーん、これは今日も歯磨きしないといけないなぁ。分かってはいるんだけど面倒くさいんだよネ。

我ながら見事な一気飲みを果たした私はぷはっと肺に残った空気を吐く。そうしてから隣に立つ彼女を視界に入れた。

「いやぁ、流石はみゆきさんだ～。あったまいいねー」

「いえ、食べ方は人それぞれ自由ですから……」

上気した頬で彼女はそう謙遜をするように一歩退いた答えを出す。うーんこの距離感は嫌いじゃないけどもっとこう肩を抱き合うとまではいかないけど肩を合わせられる程度には縮めたい所だよねぇ、でもみゆきさんは攻略難易度高そうだからそうそう上手くいかないかも。ときメモで言う藤崎詩織ちゃんのような感じ、あれは辛かったなぁ……。

「あっ。シュークリームはどうやって食べる?」

チョココロネと一緒で、何も考えずに食べると穴からクリームが漏れちゃうんだよ

ねぇ。みゆきさんはそれをどうやって攻略してるんだろうか。
「えっ、シュークリームですか？　そうですね。私はまず二つに割って、蓋部分をポット部分のクリームにつけて食べて、そのあと今度はポット部分を食べます。そうすると、クリームがはみ出したりすることなく、クリームとシューをバランスよく食べられるんですよね」
「はぁ～……」
　みゆきさんの説明に、そう感嘆の声を上げることしか出来なかった。なんというか、よくそこまで考えてシュークリームを食べられるなぁという、変わり者に対するような物だけれど。いやでも実際シュークリームが目の前にあるとそうする前にかぶりついちゃうんだよネ。こぼれるとはわかっちゃうのだけれど、それを笑い話にするのもまた一興みたいな。そういう効果があると思っているんだケド。
　なんだか、みゆきさん家のおやつの時間は静かで優雅そうだなぁ～。私には似つかわしくない雰囲気だ。約一名同類もいるけど。
「おいコラ泉。なんとなーくだけどお前の考えてること分かるぞ。とりあえずバカにしてるだろ」
「いやいや古谷君。そんなことはあーりませんことよ」
「ニヤニヤしながら普段と違う口調ってだけでもう隠す気ないだろお前！」

ご飯中だと言うのに立ち上がり叫ぶのは男友達の古谷君。嫌だわ下品な男性って。ほらほら、そのまま礼儀が悪いと。

「古谷君、食事は座って食べましょうね？」

「アッハイ。すいません」

ほーら言わんこっちゃない。みゆきさんに怒られてやんの。

やーいやーい古谷君の下品作法、短期損気マン、ミストさん、お前のとーちゃん緑髪ー。

「お前全部口に出てるんだよ！」

「あはっ☆」

ここまでの通り、からかうととても楽しい男子だ。これだから古谷君の友達はやめられない。

よく男女の関係に友情はないって言葉を聞くけど、私はそうは思えないんだよネ～。実際私と古谷君はネトゲーやサークル等もあって中々距離が近いけど友達のままだ。多分これがどう転ぼうと恋人の方になるのなんてありえないんだろうなぁ、まぁだからこそつかさを応援できるわけでもあるし。

「あっ、じゃあケーキはどう食べるの？」

「ケーキはですね……」

だというのにつかさぁ……そんなに長くその話にくっついてないでもっとこう古谷君の気を引こうって考えはないのかな。いや、あんまり考えてないのかも。

私も初恋すらしてないから偉そうなことは言えないのかもしれないけど、でもその分有り余ってのこのゲーム歴がある。恋愛だってギャルゲーと一緒だよ、話す時間が、一緒にいる時間がフラグに繋がる。あんまりにもチョロく建てられてしまった側であるならばそれを意識しないと勝負に勝つことなんて夢のまた夢、なのだ！

「おい、難しい顔してるぞ」

「ん、難しいこと考えてるから当たり前だって」

「いやじゃなくて、何考えてるんだってこと」

「いやー、古谷君には分からないことだと思うから放っておいていいよ。それよりほら、二人の会話に――」

「無理」

はぁ？

「お前放っておくとか無理だって」

えっ、何。デレ？　突然のデレ？　なんでよりにもよって私相手にそれを発揮しちゃうのかな。いや嬉しくないとかそういうことじゃなくて、タイミングが悪いっていうか。いや嬉しくないわけじゃないんだけど、対象を間違えてるかなって。それは私じゃ

なくてつかさ相手に発揮するべきだって！
「……えっと、ほら。乙女の悩みってやつだから」
「なら一つの視点に固まって見るよりも、新しい視点を入れて考えを広く持つのがいいんじゃないか。俺でよかったら話してみないか？」
　なんでこんな親切なの。おかしくない？　ここまで来るともはや期待より疑いの方が先行してしまう。いやでもちょっと期待もあったりとかなんとか嫌いじゃないし好きな部類だし、あぁでもどっちかっていうと友達のままでいたいような夢をみたいような！
「ほら、早く言えって。言えばその企み、まだ拳骨一つで許してやろう」
「……あー、うん。だよね、知ってた」
「はぁ？」
　おれは　しょうきに　もどった　！
　おのれこちとら男性に耐性がないに等しい喪女なんだぞ。この先ずっとこうだと考えると白目を向いてしまうような気持ちを片隅に置いてる儚い女子高生なんだぞ。
　ネット？　やだなー画面向こうの相手の性別なんて気にしてたらネトゲでパーティーやギルド立ち上げなんてできないって。っていうか気にするような相手なら即行切るし。だってキモいし。

しかしおのれ九平次畜生め、生かしておこうか逃がそうか。どちらにせよ絶対にこのままでは済まさない。月夜ばかりと思うなよ、ＰｖＰで嫌って言うほど思い知らせてやるわ。

「お、覚えてろよ！」

「はぁ？」

喪女の恨みは恐ろしいってことを教えてやる！　今夜にでもな！

◆◆◆

平均。五十歩百歩、どんぐりの背比べ、目くそ鼻くそを笑う、といった比べてもどっちも糞なんだから仕方がないと言った状態のようなことをいう言葉だ。嘘だ。本当は全体水準にある一定のライン、このラインのことが平均と呼ばれる。人に当てはめれば秀でた所はないが、悪い所もないという非常に中途半端な人間のことを言う。そう、つまりは俺のことを言う。運動能力はマシだとは言え、頭脳は４０人クラスで２５位ぐらい、容姿は所謂モブそのもの。人を隠すなら人混みの中、という言葉があるように、俺はまさに人を隠すのにしか役に立たないような人間だ。ようする回りとほとんど同じ顔だってことだな。どうして外国人の顔は皆同じに見えるのだろうか、多分理由は俺のような人間が嫌というほど存在しているからだろう。

長々と語ったが、要約すれば俺は普通の人間ということだ。この小説において俺は自

身も知らぬ才能が発揮されたりだとか、突然隠された力が覚醒するわけでもない。できることはするができないことには手を出さない。そういう人間だと覚えておいてくれ。

授業の終わったばかりの教室は、どことなく解放感に包まれているような気がするのは俺だけではないはずだ。授業中はあんなにも窮屈な箱庭であるのに、なんだこの爽やかさは。今なら珍しく走って帰れるような気もする。いや、疲れるからそんなことはしないが。それに走ったところで歩いた場合と相対的に時間は変わりはしない。無駄なことは嫌いなんだ。そう無駄なんだ、無駄無駄。

帰り道に誰か誘って何か食べようかと周りを見渡してみるが、ものの見事に知り合いが一人もいない。在るのは名も知らぬクラスメイトばかり。あえてここで女の子を誘って友人を作り、あわよくばそのまま恋人コースをめざして「全速前進だ！」と張り切ってみようか。

――いや、よそう。どうせ泣くことになる、結果が見えるようなことをしてはいけない。無駄は嫌いなんだ……しまった、これでは天丼だ。今日のところは大人しく、一人寂しく食べ歩きと行こう。覚えてろよ！

荷物を片付けて教室を出ると、驚いたことに人の流れが帰りの階段とは逆方向に向かっていた。学校なんてそんな好き好んで長くいる場所でもないだろうに、一体全体なんなんだ。

考え込むこともなく、答えは人の流れの先を見ればすぐに分かった。全員が掲示板に少し目を向ければ落胆や喜びを表に出して向こう側の階段から帰っていく。つまるところあれはテスト結果の貼り出し、順位表と呼ばれるものがあるに違いない。

はたと思い出す。そういえば前のテストは読みが当たって勉強した範囲とテスト内容がドンピシャであった。これは期待できるな、と少し得意気になっていた気がする。

どれ、一つハナタカにでもなってみようかと流れに添うように歩みを進める。

やはりというべきか、順位表の前にはちょっとした人だかりができていた。いや、容易く予想はできることであったけれど、ここまで自分のテストに興味がある奴がいるとは思わなかった。しかし見るところによると来る量より去る量の方が多い、あと数分もすればゆったりと眺めることが出来るだろう。

「古谷君」

「……あぁ、柊」

目立つ黄色のリボンに紫陽花色の淡い髪、柊妹を断定するにはこの二つの要素だけで十分である。いや、後は柊妹のいい匂い付け足すべきか。よそう、まだそこまで変態になった覚えはない。

友達の多い柊妹にしては珍しく、その隣には誰もおらず滅多に見ることはないだろう一人の状態であった。テストの点数なんて柊妹にとっては全く興味がないであろうは

ずなのに、一体全体どうしたことか。
「珍しいな、柊が一人なんて」
　気になることは聞いてしまうタイプの俺は、地雷かどうかは踏んでから決めると言わんばかりのスタイルで直球勝負を仕掛けてみる。対して柊妹はその質問を聞いて初めて気づいたといった風にバッと後ろを振り返ることで反応を見せる。
　……なんだ、もしかして迷子にでもなったのか？
「こ、こなちゃ～ん……！」
　と、困った風に声をあげる。どうやら、迷子ではないようだ。どっちかと言うと裏切られたというか、騙されたというか、そういう反応に見える。多分、気づかぬ間に置いていかれたのだろう。意地悪好きな泉の考えそうなことだ。
「……まぁなんだ、災難だったな」
「はぅぅ……」
　しかし、困った。俺はそもそも泉も含めた男友達二人相手でなければ自分から流暢に喋ることができない。根っからのコミュ症だ。小学校の時からこうだったのだから、今更この数秒で己を変えることなどできやしない。いや本音を言えば変える気なんて微塵もないのだが。
　人が肩を落として去っていく中、どこか痛い沈黙が俺らを包む。うぅむ、やはりいい

加減話を振るべきだろうか。
「あっ、あのっ」
「おっ!? お、おぉ……なんだ?」
思わぬ不意打ち。急なことでビビってすっとんきょうな声をあげてしまった。周りの人間はこちらを気にしてはいないだろうか、出来ればそのまま無視で頼みたい。
「古谷君って、好きな人とかは……?」
「――――」
――――なんだ、このシチュエーション。なんなんだ? どういうことなんだ? この世はエロゲーだった……?
落ち着こう。素数を数えるんだ、素数はいつでも私に勇気をくれる。1、2……しまった、1は素数じゃない。
よし、なんとなく冷静になれてきた。この質問をされる場合の状況を考えよう。質問をされる側の状況としては比較的モテる人間であると見ていいだろう。誰にでも優しくする八方美人で、その癖それの責任を取ろうとしない、所謂与えるだけの存在であって貰う立場の人間ではない。
考えるだけで腹が立ってくる人間だ、死ね。
対して質問をする側の状況はどうだろう、まず恋をしているのが前提条件として考え

てもいいだろう。気になる人の何かが気になるのは恋の常だ。何から何まで知っておきたいし出来うる限りであれば叶えてあげたい、と思うのもまた人情。

次にこの状況を今に当てはめて考えてみるとしよう。俺がされる側で、柊妹がする側。

――そうか、なるほど、わかったぞ。

柊妹は恋をしている。しかしその相手は振り向いてくれない、自分に何か非があるのではと考えるのは彼女であれば必然的。そこで同じ男性である俺に訊ね、その恋のための糧にしようとしているのだ。

――なんて、なんていい子なんだろう

まさに甘酸っぱい青春の形、理想的な恋。成就を全力で願わざるを得ない。だがここで考えてしまうのは相手が誰なのかということになるが、それ以上の疑問は野暮というもの。俺のこの『柊妹を恋人にしたい夢』を引き裂いてパワーに転じ、全身全霊で答えて見せよう。

「……そう、だな。今はいない、特にそういう風にも考えたことがないな」

「そ、そうなんだ……ご、ごめんね。変なこと聞いて……」

柊妹は悲しみをたたえた笑みを浮かべる。俺の言葉はまだ終わってない。

「でも、柊が恋人だったらって考えることなら、何度もあるよ」

「へ」

「男なら誰でも考えることだよ。柊みたいなかわいらしい女の子なら尚更」

そう、だから柊妹。お前の想っている相手だってそれは同じはずだ。っていうか柊妹でそういう妄想をしない男がいるならそいつはゲイか気狂いだ。リア充？　あいつらは人の理から外れた奴らだからノーカン。申し訳ないが、目の前で自分達だけの空間を作るのはＮＧ（憤慨）

「……」

「……」

沈黙が痛い。どこかで失敗してしまっただろうか、俺としてはかなり痛む心を抑えて頑張ったつもりなのだが。やっぱり顔か、顔なのか？　いや残念なのは俺の思考回路か？　どっちもか。今更だった。何にせよ俺が失敗したのは間違いないのだ、間違いでなければ何か反応の一つもあっていいぐらいなはず。それさえ無いとはもはやこれまで。

悩んでいたところで、目の前の人込みが無いことに気づく。これは幸運、さっさと自分の順位だけ見てこの場を離れるとしよう。柊妹に関しては失敗した俺がいたってもう意味がないだろう。早くこの心の底にたまっていく後悔と無念をふて寝して静めたい。

表に写る俺の順位は２５位。なんだ、いつも通りじゃないか。期待できるとはなん

だったのか。いやそんなことはもうどうでもいい、さっさと帰るとしよう。あぁやらかしたやらかした。

そうしてその場から逃げるように、俺は懈怠で重い体を引きずって帰路へと入った。

因みに泉は１０位以内だった。納得いかねぇ。

# 病の女

季節の変わり目には風邪を引きやすい、なんて話がある。季節の変わり目は気温の変化が激しいため体がついていけずに免疫力が低下、そこを風邪につけこまれる、というものだ。よくある話の一つだ、こういうのを聞くと大昔からそうだったんだろうかと考えて少しロマンを覚えるというものだが、実際のところどうなのだろうか。そういう面白い発見をする研究者こそニュースで取り上げられても良いものなのに、何かと科学的発見ばかり目につく気がする。それはあまりには俺がひねくれすぎてるからだろうか、しかし中々お目にかからないというのは事実な気がする。

閑話休題。

つまるところ、この季節に風邪というのは引いても仕方がないものなのだ。友人が風邪を引けば出来る限り見舞いをしてやるのが友情と言うものかもしれないが、その相手が異性で、ましてや別クラスの人間であった場合人は見舞いをするのだろうか。同姓ならともかく、異性には難しいと思う。

結局何が言いたいのかと言うと、この状況は物凄く気まずいということだ。

熱が引かずに顔を赤らめ汗をかく女子、そしてそれを何故か見守る破目になった俺。

どうしてこうなった、いや理由ならわかっている。
　元々は見舞いの品だけでも、と親から貰ったスポーツドリンクとおかゆの元を届けに柊家に来たのだが、泉とは入れ違い、柊はゼリーを買ってくるついでと言ってご家族の方と一緒に買い物へ、何故か妙に受け入れられている俺は柊姉の看病を任されてしまい、今こうして柊姉の隣で看病のようなことをしているのだが当の本人は薬が聴いたのか安らいだ表情でぐっすりと寝ている。
　つまり現状、羞恥心があるのは俺一人ということになる。
「タオル変えてるだけだけど、看病ってこれであってたっけ……」
　冷えた水が入った小さめのタライにぬるくなったタオルをつけては冷やしてデコに置き、またぬるくなるから冷やして置く。というアニメで見たことを参考にしてやってるのだが、これって余計に体を冷やしたりしないだろうか。いやしかし熱を持った患部を冷やすというのは医学的にも大正解な気がするしこれであっていると思いたい、そうじゃなくて風邪が悪化したのちにはもう土下座でもなんでもして詫びる他ない。
　しかし人の弱った姿にはエロスを感じるという話を聞いたことがあるが、いやまさにその通りだなと思った。
　赤く染まった顔、浮かび上がる汗、そして少しばかり荒い吐息。柊姉はいつも気が強いこともあって、こういう弱った姿がどこか官能的に見えるのも仕方がないと言えるの

かもしれない。

だが男古谷、柊家の信頼は決して裏切ったりなどしない。相手が美人というだけで手を出したくなるのは男の性ではあるが、理性で欲をすっぱりと切り離せば間違いなど起きるはずもない。

さて何度目になるだろうか、そろそろ水を変えた方がいいのだろうかと浸したタオルを絞っていざ乗せようと言うところで、柊姉が瞼を上げた。

「……よ、よう」

とりあえず当たり障りのない挨拶をかます。少しどもったせいで余計に不審者感が増したような気もするがもはやなるようにしかならないだろう。

「……なに、してるの？」

「……見ての通り、お前の看病だけど」

まだ半ばほどしか上げられていない目は、じっとりと俺を見つめて何かしら責めているようにも感じられた。失敬な、こっちには柊親に任せられたというちゃんとした許しがあるというのに。一応そういうことになったと説明すると、柊姉はため息をつき寝転びこちらに背を向けた。

なんだ、やっぱり俺が悪いのか。というかタオル乗っかってるのにそういうことすると、ほら見ろ落ちたじゃないか。

「……真面目に看病してたんだ」
「お前は俺をなんだと思ってるんだ」
「一応男だし、何かしらしたんじゃないかと思った」
「するわけないだろ」
　そういう欲がなかったとは言わないが。
「そうね、私が悪かったわ……。あー、まだ頭だるい……」
「なにか飲むか。と言っても俺が用意できるのなんてスポドリぐらいしかないけど」
「十分ありがたいって」
　なんとも都合よく置いてあるコップに持参したスポーツドリンクを注いで身を起こした柊姉に渡す、恐らくは薬を飲ませるために用意したものなんだろうが、この際理由はなんでもいいか、他人の家のリビングを漁るのはなんだか心苦しいというか忍びなかったし。
「……温いんだけど」
「持参のしてきたやつだからな。冷蔵庫にもしまってないし」
「あんた、気が利かないって言われない？」
「他人の家の冷蔵庫漁るような勇気、俺にはないから」
　一口含んだ後不満げにこちらを睨む柊姉をなんとか流す。いや、温くしたのは悪かっ

たと思ってるが他人の家の物ってどうも弄れないし触りにくいんだ。俺の神経は泉ほど図太くできてない。
「ま、何はともあれありがとう。見舞いだけでなく看病までしてくれて」
「友人の見舞いぐらいするって。それに柊に頼まれて断れる男子がいるだろうか、いやいない」
「あんたほんとうちの妹好きだな……」
「正直彼女にしたい」
「する勇気もないんだから黙ってろ」
「アッハイ」
　思わぬ地雷を踏んでしまったようだ、いや姉として妹の身を心配するのは当然か。にしたってその目は怖すぎるから止めてくれ、ハイライト入ってないぞ。
「……そういやあんた、私のことなんて呼ぶっけ」
「柊」
「つかさのことは？」
「柊」
「紛らわしくない？　っていうか紛らわしいわ」
「と、言われてもな」

　人を名前で呼ぶのは些か抵抗感があるというか、羞恥心が勝るというか、そこまでの勇気は持ち合わせていないというか。そういう由を伝えると柊姉はそれはもう見せびらかすようにため息をつく。しかもポーズまでついて呆れる姿勢としては１００点満点だ。
「男としてどうなのそれ」
「世の中十人十色なんだよ」
「はいはい草食系男子草食系男子」
　中々にイラッとくることを言ってくる奴だ、思ったことをズバズバと言う姿勢は泉もそうだが、柊姉は姿勢に関してはそれ以上の物を持っている。しかし実際こんな風貌をしているのだから男の一人や二人は食っているのだろうな、と考えると言われても腑に落ちないが納得はできた。これからは男喰いの柊と思っておこう。
「わかった、これからあんたのこと名前で呼ぶから、あんたもかがみって呼びなさい」
「えっ、嫌なんだけど」
「返事は？」
「アッハイ」
　泉を唸らせるほどの拳を持つ者を相手に、しかも今まさにそれを放とうとしているのを前に首を横に振ることが出来るだろうか。いいや、誰も出来はしない。頬骨の骨折す

るかもしれない威力を馬鹿なことして受けたいとは思わない。
「下の名前は？」
「大樹です」
「大樹ね。……よし、よし。大樹、大樹……」
柊姉は俺の名前を聞いた途端にまるで噛みしめるかのように何度もそれを呟く。いや、そこまでされると流石に照れてしまうんだけど。なにこれ、なんかの罰ゲーム？
顔に熱が集まっていくのが意識せずともわかる。勘弁してほしい、名前を呼んでくるのなんて家族以外にまともに存在しないんだから、しかも相手が女子なら尚更辛い。
いや止めてほしいわけじゃないどんどん呼んでくれ俺嬉しい。
「大樹」
ぽっと、力強く方向性を持って呼ばれた。剃らしていた視線を柊に向けると、なんだか妙に熱心にこちらを見つめている。あっ、やばい。これ呼べってやつだ、私が呼んだんだからお前も呼べって言外に言ってるやつだ。
――――や、やるか。
「……か、かがみ」
「大樹」
「か、かがみ」

「大樹！」
「かがみ！」
　なんの罰ゲームだこれ。っていうか何回言わなきゃいけないんだよ俺、名前を呼ばれるのは嬉しいけど呼ばせるのは勘弁してくれ。色々と恥ずかしすぎてなんかもう逆に辛くなってきた。それでも自分自身で止められないのは、柊姉の表情がそれはもう嬉しそうなものだからだろうか。
　もう何にもわからなくなってきた。
「……よし、これぐらいで勘弁してあげるわ」
「あ、ありがとうございます……でも、あれほど呼ばせる必要あったか？」
「あれぐらい荒療治じゃないとどうにもならなさそうだったしね。ま、おかげで満ぞ……いえ、愉悦できたわ」
「愉悦？」
　さ、流石は男喰いの柊だ。いつも泉に弄られてもご丁寧に突っ込んでるからM寄りなのかと思ったら、まさかこんなにS気質だったとは。人の振り見て我が身を満たすとは、恐ろしい女だ。もしかして、俺これから学校で会うたびにこんな公開処刑されるのか？　すっとぼければ見逃してくれたりとかしないだろうか。
「今度柊って呼んだら、つかさにあることないこと吹き込むわよ」

「大丈夫だってかがみ俺を信じろよ！」

死にたくなってきたなぁ。軽く鬱に浸っていると、随分と時間が立ってしまっていることに気づいた。しまった、今日の料理当番は俺だ。早くスーパーにいかないと、半額弁当の売り切れてしまう。

「悪い、時間も時間だしもう帰るわ。長居して悪かったな」

「いいって。看病、ありがとね」

「あぁ、お大事に」

そう言って柊姉の部屋から出て扉を閉める。しかし名前呼びすることになるなんて、とんでもないことになったな……しかもこれからずっとだなんて、俺のメンタルは果たして持つのだろうか。いや、なるようにしかならないか。

とりあえず挨拶して帰るか、と思ったところで曲がり角から淡い紫の髪の毛が覗いているのが見えた。あの色は、確か。

「……柊、何してるんだ」

「はうっ!?　あっ、あわわっ!?」

心底驚いたであろう悲鳴の後に、なにやら慌てるような声が聞こえたと思ったら、次の瞬間には物陰から柊妹がこけて現れ出た。なんともダイナミックな種明かしなこと。これを素でやってるというのだから恐ろしい存在である、可愛い。

「大丈夫か？」
「え、えへへ……ビックリしてこけちゃった……」
　手を差し伸べると、それを掴んだ柊妹はそう言って恥ずかしそうにはにかんだ。可愛い。
「どこでもお構いなしだな、それ」
「む、したくてしてるわけじゃないんだよ？　ただほんと、気がついたらって感じで……」
　大変だなと同情気味に言ったのが、どうやらシニカルに聞こえたのか柊妹はすっかりむくれてしまった。可愛い。
「あーいや、そうじゃなくて……まぁいいや。親御さんはどこにいる？」
「えっと、リビングにいると思うよ」
「そっか、じゃあ俺は挨拶して帰るよ。また学校でな」
　少し素っ気なく映っただろうか、いやしかし俺も色々と急がなくてはならないし、今回ばかりは仕方がないと言うことで柊妹にも大した悪印象を与えてない、ということにはならないよなぁ。辛い。
「あっ、ふ、古谷君！」
「は、はい!?　なんだ？」

背後から少し大きめの声で呼ばれて、思わずドキッとした。いや胸の高鳴りという意味でなくて、純粋にビックリしたという意味で。振り返ると、当の本人は視線をあっちこっちにやってなにやら慌ててるような迷ってるような、そんな雰囲気を醸し出していた。

ついにキモいとか臭いとか言われる日が来てしまうのか、俺。そうなったら不登校も辞さない程のダメージを受けてしまうこと間違いなしだぞ。

「よ、よかっただけどね」

「……？　おう」

「私のこと、つかさって呼んでくれないかなって思っちゃったりそうでなかったり……」

「……」

なんだこのエロゲーみたいな状況。なに、もしかして俺に気があったりとかするのか。いやでも、あれ、柊妹って好きなやついるんじゃなかったっけ、確か前に恋愛相談受けた覚えがあるんだけど。テストの結果発表、掲示板前、うっ頭が。

――――そうか、分かったぞ。

これは、押して駄目なら引いてみろ作戦！　好きなあいつの気を引くためにわざと違う男子と気があるように接することで向こうの気を引くという、超高等テクニック！　柊妹はまさにそれを実行しようとその対象に俺を選んだわけだ、しまいには泣くぞこい

つ。

「……わかった、また今度学校で会ったらでいいなら」

「っ。う、うんっ！　ありがとう古谷君！」

ひまわりのような喜色一面の笑顔はここ一月で一番で可愛らしい笑顔でした。一方俺は色々と辛すぎて心の中で泣いた。

そのせいだかどうかはわからないが、俺は無事インフルエンザにかかった。っていうかあいつ風邪じゃなかったのかよ。